

【旧版】	幻影の剣	ユ
ニコーン	～ 一章	ユ
ニコーン	～	

巳影樹生

## プロローグ

---

—部屋から出でる—

朝、差し込む日差しがまぶた越しに虹のような光の粒を映し出す。  
目を開けると、朝の訪れを認めなければならない気がして、僕は布団で顔を隠す。

このまま眠ろう。

白い薄手の羽毛布団は、さらりとした感触の布地が心地よく、軽く、暖かい。  
その柔らかい闇の中で、僕はこのまま眠ろうと、雛鳥のように丸くなる。  
けれども朝の日差しは、羽毛を透かし、朝の日差しは布団の中を照らす。  
僕が夢の世界に帰ることを許さないかのように、暖かく柔らかなまどろみの中に、朝の訪れを突きつけてくる。

布団の中のうっすらとした明かりの中で、僕は目を塞いだまま手を下に伸ばす。  
固く、大きくなる、それに触れる事で、気持ちよくなるモノに。  
しかし、今の僕には、ソレはついていなかった。  
夢の中に戻ろうと、顔を枕に伏せようとしたとき、目覚まし時計のベルがけたたましく打ち鳴らされた。

毒のように頭に染み込んでくるベルの音に、僕は諦めて布団から出た。

まだ肌寒い4月の朝、冷たい空気の中、寝間着のスエットを脱ぐと、下着姿で姿見の前に立つ。

白いTシャツに黒いボクサーブリーフ。  
太っているわけでもなく、痩せてもいない。  
それほど背が高いわけでもなく、小さいわけでもない。  
黒髪の少年のような、少女のような、そんな中性的な姿が映っていた。  
胸には膨らみは無く、股間には何もついていない。

僕には何も付いていない。

ハンガーにかけられた折り目の無い制服を着る。  
白いシャツ、灰色のジャンパースカートに灰色のブレザー。  
姿見の鏡に映るその姿は女子中学生そのものだった。

元からオチンチンがついていないのかわからなくなるくらい、この姿を自然に感じる。

けれど、オチンチンが在った頃の間を、僕は覚えている……。

\*

学校へ向かう地下鉄の中、同じ制服の学生達と共に揺られる。座席は埋まり、手すりはほとんど埋まっている。混み合う電車の中で僕は辺りを見回した。見渡す限りでは女生徒しかいない。セミロング程の黒髪が多く、中にはボブやロングのポニーテールも居るが、それほど数ではない。

皆、僕と同じくらいの年頃のように、一人で文庫本を読んだり携帯電話をいじったり、音楽を聴いていたりする。

彼女達が本当に少女なのかは僕にはわからない。

電車の音が支配する沈黙の中、僕は中吊りの広告に目を移す。

『無性化する子どもたち』

ここに居る皆も、僕と同じなのだろうか、男だったのか、女だったのか、わからない。

しかし、皆の制服はスカートだ。性を失った子供は、皆女子の制服を着る事になっている。

『長らく御乗車いただき、まことにありがとうございました～、次は～終点～、降り口は左側です。』

沈黙を終わらせる報せと共に、列車は急ブレーキをかけた。

ブレーキの雄叫びと軋む車体が中に居る僕らを叩き起こすかのように揺らす。

列車が止まりドアが開くと、皆吐き出されるようにホームに降りていく。ホームが空いてきたところで僕も列車を降りた。

暗く、狭いホーム、天然の洞窟をそのまま利用しているようなトンネルは、赤い岩壁から地下水が染み出し、壁を伝い流れている。吹く風は生暖かい。

薄明かりのダウンライトの下を改札に向かって歩き出すと、列車が折り返し、発車した。

僕は列車を見送ると、改札へ向かい歩き出す。

帰る事はできないのだと。

暗い通路を進む。白熱灯のダウンライトが照らすトンネルの中を。

闇を歩きながら、壁に描かれている抽象画らしきものを見る。子供が描くような棒人間のようなものが、弓を持っている。

倒れている人間もいる、進んでいくと牛のようなものとその正面に立つ槍を人間が立っている、狩人と獲物の絵だろうか、その絵の人物達の股間が彼らが男性であることを示している。

さらに先に進むと、その男性らしき棒人間が倒れている絵が描かれていた。

目をそらし、闇を進む。

暗い通路を進むと広いドーム状の地下空間にでた。

壁はトンネルと同じ赤い岩壁、すり鉢状の下降する階段になっており、その壁面には裸婦像らしき膨らみを持つ人間のようなものが掘られている。

そのすり鉢状の岩壁とは対照的に、床と天井からの半球状のドームの部分は滑らかな球面状に磨かれ、白く塗装され、ドームの頂にある天窓からは薄明かりが射している。

そのすり鉢状の下り階段の先に改札が見える。改札へ向かい歩みを進めながら、懐にあるパスに手を伸ばす。

階段を降り、パスを取り出そうと――

どーん！

していた所、突然背後から、ぶつかってきた何かに突き倒され、倒れた僕は、何か柔らかなものに押しつぶされた！

仰向けになろうと身を振ると、何かが視界を塞いでいる。それは僕の視界を塞いだまま、のたうち回っている。

柔らかいものが二つ、何かボウルのような形に包みこまれたもの、それは、心地よさを誘ういい匂いがする。

そんな柔らかな闇に覆われ、心地よさと息苦しさに遠のく意識の中で、僕は闇の正体に気づく。

柔らかな二つのボウル、これは……。

おっばい！？

慌てて自分の上に乗っているものを押しあげると、その姿を天窓から射し込む光がその姿を照らす。

胸のある……、女子。

真鍮色に輝くウェーブがかかった髪、その表情は視界が歪んでよく見えないけれど、天窓の光が後光となり、虹を作り出している。

僕と同じ制服のジャンパースカートは、肩紐が外れ白いブラウスに包まれた膨らみを露わにし、その膨らみを包み込む手と布地にくいこむ指が、布地に隠された豊かな胸の輪郭を強調し、指先に柔らかな感触を伝える。

――手に収まって……感触を伝える！？

僕の手の中に有る二つの膨らみ、その膨らみを驚掴みにしている自分の手。

「わあっ!？」

慌てて手を離すと少女もあわててのけぞり、僕に馬乗りになる姿勢になった。

沈黙が辺りを包む。

胸が高鳴り、視界も歪む。何もかもがぼやけている。

けれど、目に映る彼女の姿は虹色に輝いて見えた。

「あの……、うっかり転んでぶつかってしまって……、すみません！」

馬乗りのまま僕の胸に手をつけて頭を下げる少女、その柔らかな重みが押しつけられる。

「……とりあえず、どけてもらえると助かるんだけど」

僕がそう言うと、彼女は自分の状況を理解したのか慌てて立ち上がると、服を直して改めて何度も頭を下げた。

僕も立ち上がろうとするも、視界が歪んでいる。何かがおかしい……、と思ったら何時の間にか僕の顔にメガネが掛けられていた。

「すみません！転んだときにうっかりメガネが掛かってしまったみたいで。」

彼女は僕の顔に掛かっているメガネを取ると、自分の顔に掛けた。

僕は改めて彼女の姿を見る。

今の世界でおっぱいは珍しい。性を失っていく子供達、それは少年も少女も等しく、その生殖器や性徴を失わせていく。

そんななかで手に収まるだけでなく、指が埋もれるだけのおっぱいを持つ少女は珍しい。

視線を感じ、顔を上げると、少女が僕の顔を見つめてくる。

ジロジロと胸を見たのは失礼だった、そう思い謝ろうとしたところ、少女は何やら安心した様子で、胸を撫で下ろすと。微笑んできた。

そして彼女は落ちている鞆やブレザーなどを拾うと、おじぎをして改札に向かい、途中何度も振り返り頭を下げては転びそうになりながら改札を出ていった。

あの少女は何を急いでいたのだろう、そんな疑問について考えながら僕も改札を出るべくパスを取り出そうとするものの、パスが無い。

辺りを見回すと、すぐ後ろにパスが落ちていた。

落ちているパスを拾うと、そこには見知らぬ名前が書かれている。どうやら先ほどの少女が持っていたパスは自分のパスだったらしい。ぶつかった拍子に落とした物をを間違えて持っていたようだ。

仕方なく彼女のパスで改札のセンサーを叩くと、改札は開かれ、僕が彼女のパスによって通過

する事を許した。

\*

駅を出る。

あの少女は何を焦っていたのだろう、

そんなことを考えながら駅を出た僕は辺りを見回した。

正面には石畳の道が山へ続いていて、その先に門らしき物が見える。その周りは森が広がって居て、所々に民家らしきものがまばらに建っている。

—冷たい

空を見上げると、鉛色の空から雨粒が降ってきた。僕は手のひらサイズの透明なビニールのレインコートをかぶると石畳を進む。

高い柵に囲まれた山のふもと、その頂を見上げると、白い塔のようなものが見える。

王立石陽学院。

近年、少年も少女も、第二性徴が訪れる事無く、性器が萎縮していくという現象が各地で発生していた。

事態を重く見た国は、そうした少年少女の生殖能力の回復を研究するための研究施設を作った。

そして研究施設で子供たちを保護し、生殖能力回復の研究を行っている。

僕もその一人だ。

学棟への道はうっそうと茂る森の中を進んでいかなければならないらしい。

その道はしっかりとした石段で舗装され、森との境界は丈夫そうな鉄の柵で隔てられている。

門を潜り、石段を登っていくと、柵越しに森の中の注意書きの立て札が目に入った。

『減速』

ここは山道だし、木々が生い茂り見通しも悪い、僕はそれほどの速度も出せないので気にせず進む。

『止マレ』

僕は車と違い人間なので、止まることなく進む。

小雨になってきた

『シカの飛び出しに注意』

発情期のシカは人間に突進してくるらしい、気をつけないと。

『チカンに注意』

僕は男だから……、と思ったが、見た目は女子でしかない。

雨足が強まってきた。

『人喰いクマに注意』

さすがに人喰い熊は現実的に危険だ、辺りを見回すも動くモノは無い。僕は再び歩き始める。

遠くで雷が鳴った。

『人喰いオオカミに注意』

ここって狼も出るのか……、僕は歩く足を早める。

『はやまるな、くにかえるんだな おまえにもかぞくはいるのだろう』

僕には帰れる場所はまだ無いのでさらに進む。

雷が鳴り響いた。

『死ぬなら他で死ね』

僕は死ににきたわけではないのでさらに進む。

雷と土砂降りの中、闇と化した森の中を駆け上る。

『死ヌゾ』

僕は死なない！僕は駆け出す。

鳴り響く雷と闇を振り払うように駆け上る。

校門が見えてくる。闇を抜けた僕は校門の前で立ち止まり、息を整える。ふと後ろを振り向くと、森の外れの看板が目にとまった。

『祝ってやる』

辺りに鐘の音が鳴り響く。雨は止んでいるので、僕はレインコートを脱ぐ。僕は振り返り、学院を見つめる。

そうか、だから彼女は急いでいたんだ。

——僕は遅刻していた。

\*

「お姫様のご到着だ」

校舎の一角から真鍮造りの双眼鏡を覗き込みながらつぶやく影、その声は凜々しく、整った顔立ちと長い髪、その何もかもが役者のように芝居じみている。その制服はブレザーにスラックス、男子生徒のものだ。

その影の傍らで、校門を横目に眺める黒髪の影。

「私には男の子に見えるけれど」

「いいや、あれは可憐な……、お姫様さ」



——職員室

入学早々遅刻して始業式に出られなかった僕は、職員室で山道を登ってきたことを言い訳していた。

「キミ、門の手前にロープウェイ乗り場があったらろう、あの山道を登ってきたら遅刻して当然だ」と、僕の泥だらけな足下を眺めながらぼやいた。

なるほど、通りで誰も山道で見かけなかったわけだ。どうやらロープウェイを使えば10分程で着いたらしい。そこを列車の到着時刻から鐘が鳴るまでの1時間を使って登ってもいれば遅刻しても仕方が無い。

気まずい空気の中、ふとパスを落とした事を思い出し、教師に見せようとポケットから取り出そうとしていたところ、後ろから聞き覚えのある声がしてきた。

「失礼します、——あっ！」

今朝の彼女だ。

真鍮色のウェーブかかった髪のメガネの……おっばいの子。

と、視線が胸元に引き寄せられそうになるのを必死でこらえながら、彼女の顔を見る。

彼女は恥ずかしそうにうつむきながら、ポケットからパスを出し、教師に見せる。

「すみません、私がぶつかった時に、この人のパスを間違って持って行ってしまっ」

教師は少女に差し出されたパスと僕の持つパスを眺める。

「悠希 幹（ユウキ・ミキ）」

僕の名前だ、ミキという女のような響き。昔は嫌だった、けれど今となっては似合いの名前だ……。

「御留 琉樹（オトメ・ルキ）」

女の子らしい名前、名は体を表すという風に、女の子らしい仕草に体つき。

そんなことを考えながら見つめていた僕の視線に気づいたのか、恥ずかしそうに顔を伏せる彼女。

またやってしまった。と、視線を外す。

「確かに、もういいから教室に行け。すぐにホームルームだぞ」

追い払われるように職員室を僕は御留さんと共に1年生の教室がある第一学棟へと向かう。

朝の事もあり気まずく感じる僕は、学棟への渡り廊下をただ並んで歩く。朝の事もあり、彼女の顔を見る事ができない。

始業式が終わり、移動し終えた生徒達のざわめきが教室から聞こえてくる。

「あの……」

「悠希さんて、まるで王子様みたいだなあって」

王子様、僕が？もしかして僕が男だということがバレていて、胸を鷲掴みにしたり、見つめたりしたから皮肉を込めて言っているのだろうか。だとしたらさっき胸を見つめていた事も怒って

るんだろなあ……。

御留さんの視線が注がれている事に気づく。

やっぱり怒っているよなあ、あんな事したら。と朝のホームでの出来事を思い出す。馬乗りになられて、おっぱいを鷲掴みにした事を。急に恥ずかしくなってきた視線を泳がせていると、教室の前に着いていた。

すでにホームルームは始まっているらしく、教室の中から教師らしき女性の話し声が聞こえてくる。中の様子がわかりにくい、この遅刻している状況で前の扉から入って目立つのも嫌だけれど、どちらが前かわからない以上開くしかない。

と、考えて居たところ、御留さんが教室の戸を開いてくれた。  
沈黙の中、教室中の視線が集まる。

「入学早々逢い引きして遅刻か？」

女教師のからかう言葉に沸き立つ教室。そんな教室の中を好奇の視線を浴びながら、頭を下げて入っていった僕は、教師に促され教室の後ろを見ると、最後列の窓際に隣合った席が空いていた。

「ここでは特定の席は決まっていない、そこに座りなさい。しっかりエスコートしてやるんだぞ」

女教師の冗談めかした言葉に促されながら、席に着く。

窓際は御留さんに譲ろう。

荷物を置き一息着いていた僕に、

「これから、よろしくおねがいします」

と御留さんがささやきかけてくれた。

怒っている様子は無いみたいだ。その微笑みに安堵した僕も、改めて彼女にささやきかけるように挨拶する。

「こちらこそ、よろしく」

\*

ホームルームも終わり、僕らはクラスごとに寮へと向かう。

御留さんと並んで歩く。交わす言葉は無いけれど、列が乱れて離れても、御留さんは側に来てくれる。嫌われていたというのは僕の勘違いのようだ。

僕は歩きながら寮が立ち並ぶ居住区を見渡す。

1年生の数は約300人、寮は大きく男子と女子を含む無性化した生徒に分けられており、さらに学年で分けられ、そしてクラスごとに寮が充てられている、一つの寮には30人が住むことができる15の部屋があり、それぞれの部屋に二人ずつで暮らす事になる。

寮の一回は食堂や風呂や倉庫などの設備となっていて、生徒が住むのは2階と3階にそれぞれ8部屋、合わせると16部屋だが、他の部屋は予備の部屋として備品置き場にされている。

それぞれの寮の外観は全く同じなため、迷わないように、寮の壁には番号と共に花の名前と絵が描かれている。

僕らのクラスが充てられたのはもっとも東側に建つ寮、『向日葵館』壁にはヒマワリの花と、36という番号が描かれている。ここまでの道のりを学棟と行き来するのは大変そうだ。

寮に着くとプリントに書かれている自分の部屋の番号を確認する。僕の部屋は3階の階段を挟んで右側にある9号室か。寮の中は建物の右側に階段があり、階段を挟んで右側に一部屋、左側に7部屋ある。

つまり僕の部屋だけ階段で隔てられているわけだ。

僕の部屋のルームメイトはどうなるんだろう。そんな事を考えながら扉の前に立つ僕の側に御留さんが立っていた。

「御留さんも、9号室？」

と、問いかけるとうつむきながらうなづく。

「これって、運命的ですね」

確かに、駅でぶつかって同じクラスになって同じ部屋になるのは、偶然を過ぎて運命的なものがあるのかもしれない。これから御留さんとこの部屋で暮らしていくんだ。

僕は扉を開く。

部屋の中は六畳一間のフローリングに2段ベッドと2つの机がある。これからこの部屋で、御留さんのような女の子と一緒に過ごしていく事に戸惑いを感じながら、荷物を置くと御留さんと共に1階に戻った。寮の掃除がはじまった。これから自分たちが使うであろう部屋を掃除する。御留さんがよろけながら布団を運んでいる。こういった力仕事は男である僕がしたほうがいい。そう考えた僕は、「重い物は僕が運ぶよ、御留さんはホコリを落としてくれないかな？」と申し出ると、御留さんは「ありがとうございます」と微笑むと、僕に布団を差し出してくれた。

僕は御留さんの抱えている布団を持つとベランダに運びホコリを叩く。御留さんは部屋をハタキではたいていた。上から落ちたホコリが机にホコリを落としていき、箒で掃き出す。

部屋の掃除が終わった頃、僕らは再び1階に戻った。次は寮の掃除に取りかかるためだ。

その前に、時計の針は12時を指している。入学式、部屋の掃除と体を動かした僕らは空腹を満たす昼食の時間がやってきた。

僕は体についたホコリを払い落とし、食卓につく。昼はビニール袋に入ったミックスサンドイッチとカボチャとコーンのクリームポタージュ。そしてブロッコリーとジャガイモとニンジンの温野菜、そしてピラミッド形？っぽい三角垂の牛乳だ。

「いただきます」揃っての一礼、そして食事が始まる。

食パンを斜めに切ったサンドイッチのパンは厚手で、中には薄くスライスされたハムにマヨネーズが塗られたものとレタスが挟まれている。かみしめる度に口の中に広がるハムとマヨネーズのうま味と、レタスのシャキシャキとした歯ごたえとみずみずしい野菜のうま味が口の中で一体となる。

温野菜のブロッコリーは瑞々しく、添えられているマヨネーズにつけて食べると、噛みしめるたびに若芽の香りがあふれ、その茎は甘く、噛みしめる度に瑞々しい野菜の甘みが溢れてくる。ニンジンにはクセがなく、その程良い甘みが口に広がる。ジャガイモはほくほくと柔らかく、噛むごとに芋の柔らかいうま味が湧き出してくる。

ポタージュの方はカボチャとコーンの自然な甘みのポタージュと思いきや、そこに加えられているヨーグルトの酸味が、滋味ある甘みの中にさわやかな刺激となって、ややもったりとしがちなポタージュをさわやかにまとめている。

いろいろな出来事で疲れていた僕はそれらを一息に食べてしまうと、三角牛乳にストローを挿し、牛乳の甘みを噛みしめる。喉を伝い流れ込むミルクが、僕の胃の中で食べ物と混ざり、体に染み渡っていくのを感じながら、ミルクの終わりを告げる風切り音に、三角牛乳から口を離れた。

視線を感じるので隣を覗くと御留さんが僕の顔を見つめていた。

しまった、一人で一気に食べるのは女の子らしくないか……。そう考えて目をそらすしていると、「よければ私のぶんも食べませんか？」 そう言うと御留さんは食べものがそれぞれ、綺麗に半分だけ残されているトレーを差し出してくれた。

「悪いよ、御留さんも体を動かしてるんだし、これから午後の掃除があるんだから食べておかないと」

そうやって断る僕に、「私は簡単なことしかしてないから、悠希さんはお布団を運んでくれたり机やベッドを動かしたり、力仕事をしてくれたでしょう？」と勧めてくれる。

僕は勧められて断るのも悪いので、半分だけ残されている食事をさらに半分だけ食べると、「ありがと、僕はこれでもう一杯だから、御留さんも半分だけじゃ足りないだろうしね」そうやって御留さんにトレーを返した。

御留さんはなんだか戸惑いながら、僕の残した食事を食べ終えた。

これは間接キスだよな……。そんな事を考えながら御留さんの唇を眺めていると、御留さんと目が合った。

恥じらうようにうつむく御留さん、僕は慌てて目をそらし、女の子ってこんな仕草をするんだなあ、などと考えていると、食事の終了を告げるベルが鳴らされた。



## 古い庭

---

午後は寮とその周囲の掃除だ。廊下を掃いて、窓を拭き、庭の草むしり、食堂の掃除に浴場の掃除。ここからは御留さんとは別行動になる

僕は寮の外の庭の近くを掃除するために、一人箒を持って担当とする場所に向かった。

寮の裏は紙切れなどのゴミも無く、落ち葉も少ない、僕は箒で掃き集めた落ち葉を木の根に集めておく。

寮の壁を見ると、学生のものらしき文字が刻まれている。誰かの名前や相合い傘、ここに居た生徒達の思い出なのだろう。

落書きに興味を持った僕は、他にもこうした落書きが無いか寮の周りを観察していると、森へ入って行く人影を見つけた。

山を登ってくる時に見た数々の不吉な看板を思い出す。人喰いオオカミや人喰い熊、そんな実感の湧かないものだけでなくても人気の無い森の中に入っていくのは何故だろうと疑問に思い、興味に惹かれるままその後を追った。

森の中を進む。

獣道にしか見えない道、けれどその道は平らにならされていて、古くは人の手が入って居ただと感じさせる。その道ぞいに生えている木々には熊のものらしき爪痕が刻まれている。

もしかして本当に人喰い熊がいるのだろうか、熊のいた痕跡を目にして恐怖が実感を帯びてくる。

それでも僕は森の中を進む。

しばらく歩くと開けた場所に出た、足場は古めかしい石畳で敷き詰められ、身の丈程の大きな岩がオブジェのように並んでいる。その何かの遺跡のような光景に興味に引かれて、僕は奥へ進む。

岩の間を進むと、バラの生け垣に行き止まった。生け垣の形は綺麗に整えられていて、その生け垣に咲くバラに枯れたものは一つもない。その美しいまま時間を止めたかのような綻びの無い美しさに、人間の手が入っている事がわかる。

その心地よい香りに引き寄せられ、入り口のような場所から生け垣の中に入っていくと、輝くように水平に磨かれた床石が敷き詰められた場所に出た。

中心には沼があり、蓮が浮かんでいてその中心には止まっている噴水がある。その周囲には乳白色の砕けた柱と天使や偉人らしき彫像が飾られていた。

砕けた柱と彫像を観察してみると、どちらも同じ素材、彫像の土台は砕けた柱と同じ、そこから僕は、この柱を彫刻し、彫像を作ったのではないかと考えた。

僕は並んでいる彫像を辿り、中心にある沼に近づいていく。細部まで美しく細工された彫像、一部を欠落した彫像、明らかに未完成なもの、完成した彫像を破壊したもの。粘土細工のような

人の顔や、女性の体をかたどったような体の膨らみを模したものの。何か大きな牙を持つ、口を開けた化け物のようなもの。

そうして辿っていくと、ガラス張りの建物にたどり着いた。ガラス越しに見えるヒマワリ、夏に咲くヒマワリが咲いているということは温室なのだろうか。

僕は中を見ようと入り口を探している僕に、冷たいしぶきが浴びせられた。

僕は水が飛んできた方向を見ると、そこには太陽を背に、一人の女生徒が立っていた。

「ここは一般の生徒は立ち入り禁止よ」

その声の主は腰まである虹色に輝く黒髪をたたえたの少女だのようだ。背から天に延びているかのような美しい姿勢、その佇まいからは凜とした気品を感じさせる。

「す、すみません」

その雰囲気から飲まれ固まった僕は、ただ反射的に謝る事しかできない。

女生徒が手にしているホースのトリガーを離すと、水は止まった。

ふと疑問がよぎる、一般生徒は立ち入り禁止なら、制服を着ている彼女は何者なのだろうと。

「あの、あなたは？」

「……人に問いかけるなら、まずは自分から名乗るのね」

固まっている頭から必死に絞り出した問いかけはあっけなく切り捨てられた。慌てて僕は自分の名を名乗る。

「僕は悠希 幹（ユウキ ミキ）、今日入院してきた1年で、掃除をされていて……」

後を追ってきたというのも気まずく、僕は言葉を濁す。

「随分と掃除熱心なのね。でも、ここは私の受け持ちの場所なの」

彼女の表情は逆行でよく見えない。しかし、その視線が僕を射抜くかのように捕らえていることはわかった。

「すみません、立派な生け垣や彫像、花壇や温室もがあるから、公園か何かかなって。」

僕は温室から離れながら、先輩らしき女生徒に問いかける。

「ここは昔の学院で使われていた古い庭園、今は学院の屋上にある空中庭園が使われているわ。」

彼女は再びホースのトリガーを引くと、水を撒き始めた

「昔はここも賑わっていた。けれど、今は誰も来ることが無い禁じられた庭園……」

花壇にかけられる水の飛沫が虹を作る。

僕はただ立ち尽くし、その姿を見つめていた。

「……ここを、一人で？えっと……」

僕はこの人の名前をまだ聞いていない。そう思い、逆光を受けないように立ち位置を変えると、彼女の胸のネームプレートに目を向けた。そこには3—L、海に星と書かれている。

「3年L組、海星 アキラ（ミホシ アキラ）」

僕が名前を訪ねる前に、彼女が答えてくれた。

改めて彼女の姿を見る、長い黒髪と切りそろえられた前髪は日を浴びて虹色に輝いていて、背は高めで僕より少し大きいくらい、細身だけれどしなやかさを感じさせる体には、女性を感じさせる程で無くとも、美しさを感じさせる形の良い胸がある。

彼女は女性なのだろうか。

と、彼女の胸元を見つめていると、何か輝くものがあるのを見つけた。

透明な、輝くペンダント。宝石か何かだろうか、透明な結晶、その中に透明な結晶が、さらにそのなかに結晶が、入れ子のように入っていて、銀に輝く台座は角のある馬が象られている。

「ファントムクォーツ、水晶の結晶が年輪のように、何度も成長を続けた、その過程の痕跡が幻影のように残っているもの……」

その視線に気づいたのだろうか、僕が尋ねる前に彼女はペンダントを手のひらに乗せつづやいた。

手のひらの中で輝く入れ子の水晶の輝き、そのペンダントに視線を注ぐ海星先輩。

ファントムクォーツを見つめるその姿に、僕は輝くものを感じた。

「早く帰りなさい、そろそろ鐘が鳴るわ。」

見とれていた僕は我に返ると、その言葉が言い終わるか言い終わらないかのうちに、学院の方から鐘の音が届いてきた。

そういえば僕は寮の掃除をしていたんだっ！寮から離れてこんな所に来ていたら事が知られたら、さぼっていた事と立ち入り禁止の場所に来たことで叱られてしまう。

「し、失礼します」

僕は海星先輩に一礼すると、慌てて来た道を寮へと駆けて戻った。



いただきまーす。

なんとか集合に間に合った僕は、ホームルームを終えると夕食を食べる。

席は自由に座る事ができ、僕は御留さんの隣に座った。御留さんは掃除をしている間に友達が出来たのか、楽しげに語っていた。

皆が席につくと、いただきますのかけ声と共に、夕食が始まった。

「おっうっじっさつまっ、あなたのお名前は？」

その言葉が僕に向けて話しかけられていることに、周囲の視線が注がれていることで気づいた。

「その王子さまっての一体？」

「決まってるじゃない、運命の王子様」

その言葉に沸き上がるみんな、困った僕は御留さんに目を向けると、彼女は恥ずかしそうにうつむいていた。

教室でのホームルームで、みんなは挨拶を済ませていたらしく、自己紹介をしていなかったのは僕と御留さんだけだった。僕は席を立ち、自己紹介をする。

「悠希 幹（ユウキ ミキ）、よろしく」

「じゃあミッキーだね」

場に戦慄が走る！

「ミッキー以外で！」

危ないところだった……、僕はとっさの判断で終末の危機を回避した。

「じゃーユウキミキだから、キミキミに決定！」

なんだかむず痒い名前だけれど、世界が終わりを迎えるのも嫌なので、僕は愛想笑いをしながら「よろしく」とうなずいて席に着いた。

僕が席につくと、みんなの視線に促されるように御留さんが席を立つ。

「えっと、御留 琉樹（オトメ ルキ）です。よろしくお願ひします」

照れながらも頭をちょこんと下げる、そのかわいらしい仕草に黄色い声があがる。

「るっきー！」

御留さんはちいさく手を振り声に答える。どうやら先ほどの掃除時間に友達が出来ていたようだ。

食事をしながら僕は学院の印象について話していた。巨大な学棟、立ち並ぶ寮、巨大なコロセウムのような競技場、巨大なプロジェクターが並ぶ視聴覚室、学棟の屋上にあるという空中庭園。様々な幻想的な設備の豪華さに興奮を隠せないでいる

僕は山道を登って学校に来た事、途中にあった看板の話をしたところみんなの興味をひき、夜の空気もあってか怪談のような雰囲気でも盛り上がった。

「そういえばさ、この学院って出るらしいよ〜」

上級生から聞いたという定番とされるこの学院伝説の話題となった。

なんでも、立ち入り禁止の庭園に出るヘビの化け物、グラウンドを走り続ける化け物、いつのまにか隣にいる誰だかわからない人影、顔が二つついた肉団子の化け物。そして、闇夜に浮かぶ人影が、生徒をさらっていったり、等々。

学院では一度噂が広まりすぎて騒ぎになり、それを機に古い施設は閉鎖されたという。

「あの庭園もそうだったのかな……」

「ねえねえ、あの庭園でナニ！？」

ふとつぶやいた僕の言葉に、小柄でボーイッシュな子が興味津々に喰いついてくる。

僕は周囲の興味に答えるためにも、今日の掃除時間に森の中の庭園に行き、そこで遺跡のような庭園を見つけたけれど、当番の先輩に見つかって追い返されたと説明した。

「旧庭園ってヘビのお化けが出るっていうところだよな、もしかしてその先輩、実はお化けだったとか〜！」

ツインテールの子が喰いついてくる、僕はその先輩が実在する人物だと証明するために、先輩の学年クラスと名前を告げた。

「3年L組、海星 アキラ（ミホシ アキラ）って先輩だった」

気品有る容姿振る舞い、厳しそうだけれどカッコイイ先輩だと。話していたらなにやら空気が重くなった？皆の視線が僕の隣、御留さんに注がれている、御留さんに視線を向けると、少し表情が暗い？と思ったけれど、僕の視線に微笑みかえしてくれた。その様子を見ていたみんなは肩をすくめるなり、ため息をつくなり、おてあげのポーズをとっていた。

\*

入浴時間。

心なしか、御留さんの表情が暗い。

僕はジャージを持って風呂に行く。石鹸やタオルは備え付けの物があるそうなので着替えの寝間着としてジャージを持っていく。

洗濯物は洗濯用の袋に入れて出すそうだ。

僕は脱衣所に入ると、それぞれ服を脱ぎ始めた。スカートを下ろし、シャツのボタンをはずしていく。

僕は女子の制服を脱いでいる光景に戸惑いながら、自分もスカートを履いていて、それを脱がなければならないのだと気づく。

戸惑いながら周囲を見渡すと、みんな胸はほぼ平らで男か女かわからない。そしてその下半身には膨らみもない。その姿を見て僕は安心しながら服を脱いでいると、みんなの視線がある場所を盗み見ていることに気づく。

御留さんが一人ゆっくりと着替えていた。

みんなもまじまじと見るのは気が引けるのか、ちらちらと視線を向けている。

御留さんもその視線に気づいているため、恥ずかしそうに隠しながら脱ぐも、その恥じらう姿がよけいにみんなの視線を引き寄せているみたいだ。

僕はさりげなく、彼女の盾になるように彼女と皆の間に立って着替える。

視線の端に御留さんの姿が入ってくる。柔らかそうな膨らみのあるライン、ボタンをはずし前が開かれたシャツから淡いピンクのブラジャーと、抱えられるように包まれた柔らかそうな乳房に視線が引き寄せられる。吸い寄せられる僕は、視線を感じ我にかえった。御留さんがこっちを見ている。僕はあわてて目をそらし、自分の脱衣カゴに視線を落とすと、自分の服を脱ぎ始めた

自分の胸には何もないし、尻も膨らんでるわけでもない……。男だったから当たり前だけど、御留さんの体をみた後だと、寂しさを感じてしまう。服を脱ぎ終え洗濯物を袋に入れると、脱衣所に残っているのは僕と御留さんだけで、御留さんはやっとシャツを脱いだ所だった。

ここに御留さん一人を残して行くのも……。

「いっしょに……、入ろうか」

思った事が口から出ていた。僕は何を言っているんだろう、僕は男なのに一緒に入ろうなんて……。

「いえ、わたしは後から入るから」

自分で言った事の恥ずかしさで内心悶えていた僕に、御留さんは恥ずかそうにそう答えた。

やっぱり誰かと一緒に入るなんてのは逆に目立ってしまうかもしれない、などと自分の恥ずかしさに言い訳しながら、着替える御留さんの姿に後ろ髪を引かれながらも浴場に入っていった。

浴場に入ると、みんな湯船に浸かっていた。まだ肌寒い4月、僕は体を流そうとシャワーの蛇口をひねるも、お湯も水も出てこない。

「キミキミー、なんかシャワー壊れてるから風呂だけだって～」

それなら仕方が無い、僕は風呂桶を持って湯船に近づき、かけ湯をすると、湯船に入った。熱い湯が皮膚をぴりぴりと刺激し、暖かさが染み込んでくる。今日一日の疲れが溶けて出ていくみたいだ。

みんなの視線が風呂の入り口に集まっている。

御留さんが浴場の入り口にたたずんでいた。女性らしい膨らみある体、片手は胸を隠し、風呂桶を持つ手は下半身を隠している。その姿はさながらミ口のビーナスのようだ。

けれど、その表情は暗い。

皆の視線が集まる中、御留さんもシャワーを浴びようとするが、湯が出ないことに気づくと湯船に入ろうと近づいてきた。

みんなの中で一人だけ胸がある御留さんは注目の的になっている。

御留さんは湯船の側で立ち止まる。その顔はうつむいたままだ。

「御留さん」

僕は湯船から立ち上がると、手を差し伸べた。

視線を下げれば彼女の胸が見えてしまう、僕は引力にあらがい御留さんに微笑みかけると、彼女は顔をあげ嬉しそうに微笑み返してくれた。

延ばした手に彼女の柔らかな手が添えられる。

御留さんは僕の手を支えにしながらゆっくりと湯船に入ってくる、その時！

彼女が足を滑らせた！僕は倒れてくる乙女さんを受け止めると、そのまま湯船に倒れた。しびきが舞い、湯気が湯気が辺りを包む。

僕が湯船から顔を出すと、御留さんの顔が目の前にあった。僕が御留さんを抱きしめているような体勢になっていた。僕の胸に御留さんの胸が押しつけられ、彼女の背中に僕の手がまわっていて、柔らかな太股がからまっている。

「ミッキーかっこいー」

「王子さまだな～、キミキミは～！」

「王子様ー！」

黄色い声が浴場に響きわたる。

我に返った僕と御留さんは飛びのくように離れると、僕は皆の視線を遮るように御留さんの前に座り、御留さんも僕の後ろに隠れるように寄り添うように座った。

はやし立てる周囲に愛想笑いを返していると、腕に柔らかいものが触れた。

もしかして、御留さんの胸……。先ほどの御留さんの姿が脳裏をよぎる。

横目に自分の腕に視線を向けると、それはそっと触れられた彼女の指だった。

その指を辿り、胸の引力にあらがいながら御留さんの顔を見ると、彼女は恥ずかしそうに微笑んでいた。

嬉しそうな御留さんの微笑みに照れ笑いを返ししながら、恥ずかしさに視線を落とした時、引力に負けてしまった。

おっばいは、浮かぶんだ……。

—夜の森・プロローグ—

風呂上がりのホームルームが済み、部屋に戻る前の自由時間、僕らは食堂でくつろいでいた。

誰が言い出したのか肝試しをしようという話になる。僕が行ったという旧庭園が近くにあるということで何かを置いてくるという話になっていた。時間は夜の9時、すでに外は暗い。

やめようと僕は提案するけれど、いつのまにか作られていたこよりを使いくじ引きをする事になった。

旧庭園に行ったことがあるということで、真っ先に引かされる事になった僕は、あからさまに飛び出ている怪しげなクジを回避し、無難に適当なクジを選んだところ……はずれだった。

不満げな表情を見せる周囲の視線から退散すると、次は御留さんの番になった。御留さんはクジであからさまに怪しい飛び出ているクジを掴み、引き抜いた。

「あたり〜！」

こよりの先は赤く塗られている、当たりのクジだ。

はやし立てる周囲、うつむく御留さん。

肝試しは、庭園に行ってそこに咲いているひまわりの花びらを取ってきて、代わりに目印として用意したハンカチを置いてくる事になった。

玄関、懐中電灯を持ち、一人肝試しに向かおうとする御留さん。その表情はこわばり、緊張の色が隠せない。

僕は夜道は危険だからとみんなに言うが、盛り上がってるみんなはその言葉を遮ってくる。

僕は御留さんに、危険だから行く必要は無いよ。と制止するも、御留さんはただ扉の外を見つめながら、首を振る。

「それじゃあ、僕も一緒に行くよ」

場は静まり、沸いた。

「王子様かっこいー！」

「キミキミ抱いてー！」

「ミッキーがんばれー！」

「るっきー、キメてこーい！」

どうやらみんな、こうなる事を考えて御留さんを止めずに居たみたいだ。仕方ないから御留さんと一緒に出て、途中で引き返して言い訳すればいいか。

そう考えた僕は御留さんの持つ懐中電灯を持ち、寮の扉を開いた。

振り向き御留さんを見ると、その表情は強ばり、うつむいたままだった。僕は御留さんに手を差し伸べる。

「行こう」

御留さんは僕の顔を見つめると、再びうつむき僕の手を取った。

夜の森へ、行く。

## 夜の森

---

真っ暗な夜の森、その道は木々が空を覆い隠し、風に吹かれざわめいている。森の奥の闇を見つめていると、朝の看板やここを初めて通った時の熊の爪痕、夕食での怪談を思い出してしまい、闇の中に何か潜んでいるんじゃないか。闇の中に、僕を見る。それは何者でもない。

「そんなものは妄想だ」

僕はつぶやくと、手にした懐中電灯の光が照らしている道を見つめる。光に照らされている道には何も居ない。ただ荒れた山道が続いているだけだ。この光に照らされている道を歩き続けている限り、迷いはしない。必ずあの庭園にたどり着ける。

それに、僕一人じゃない。

僕は手をつないでいる御留さんの方を振り返る。と御留さんはうつむいたまま、僕の手を頼りに歩いているようだ。その手の温かさが、誰かが居てくれるという安心感を与えてくれる。

誰かと、手を繋げるという事の幸せを。

この体になってから、初めて感じられる。誰かの感触を。

\*

夜の森を二人黙って歩く、何を話せば良いんだろう。

「大変な事になっちゃったね」

御留さんはうつむいたままだ。やっぱり僕じゃ迷惑なんだろうか。

「みんなはやしたてて、しょうがないよね」

みんなの思いこみで御留さんを困らせるわけにもいかない、これからずっと一緒に部屋で過ごすんだし。

「いえ！私は大丈夫です！それより悠希さんこそ……」

「僕は全然、平気だよ。御留さんと一緒だから」

もう慣れた事だし。

「私も、悠希さんと一緒だから……」

僕も御留さんと一緒だから……、なんだか照れくさくなってきた僕は話を続ける。

「それにしても、まいったよね～、僕は女の子なのに、王子様王子様って」

「悠希さんはカッコいいですよ」

「御留さんまで、やだな～」

「女の子が王子様だなんて、王子様ってのはもっと男らしい、カッコイイ男の人がなるものだよ」

「僕なんて男じゃなし、女の子らしくも無いし、どっちでもないのかな」

その言葉に御留さんが立ち止まり、僕の手を強く握り。

「そんなことはありません！悠希さんは、カッコいいです……」

「女の子でも、王子様になれると思いますよ」

と、僕を見つめながら言ってくれた。

その姿を木々の切れ目から射す月明かりが照らしている。

「途中で引き返してもバレないし、そろそろ戻ろうか」

王子様ごっこもここまでやればいいのか。これ以上御留さんをつき合わせるのも悪いから、などと考えていたけれど、

「いえ、私も、その綺麗な庭園を見たいから」

と、御留さんは進む事を望んだ。

「それじゃあ……、行こうか」

僕もあの綺麗な場所を御留さんに見せてあげたい。きっと月明かりの下でも、あそこは綺麗なはずだから。再び夜の森を歩き出す。

「あの庭園にはヘビのお化けの話だけじゃないですよ。」

「なんでも、古い方の庭園にある温室の中で告白すると、想いは届くって」

御留さんは女の子らしいな。やっぱり本物の女の子は化け物なんかじゃなく、こういったおまじないが好きなんだ。

「ロマンチックな話だね」

僕は男じゃ無くなっているし、御留さんも僕を女の子だと思っているみたいだし。

もし、僕が男だったら、御留さんは一緒に来てくれたのかな……。そしたら願いが叶って……、でも。

——そんな願いは妄想だ

現実の僕は男じゃない。

男でなくなった男であって、女の子じゃない。

人々から性が無くなって行った時、僕は早い時期から男じゃなくなった。男じゃ無くなった僕は男子として扱われなくなった。

けれど、女子として扱われるわけでもなかった。

女子から見れば僕は男でなくなった男でしかない。

男で無くなった僕は、みんなの好奇の的になった。

「みんなも仕方ないね」



そんな僕は男子に告白される事もあった。

誰かに受け入れられたい僕は、その告白を受けてみた。

けれどそれは男の気持ちが解る女だと思われていただけで、僕が求められていたわけじゃなかった。

「運命だなんて、偶然でしかないのに」

男としても扱われない、女としても扱われない。それはどちらでもない化け物でしかない。

世界の誰もが性を失っていき、クラスのみんなも僕と同じになった時、僕は喜んだ。誰もが同じ、女の子として扱われるようになったのだから。誰も区別する事なく。ただ一緒になればいい。

「王子様なんて、カッコいいものじゃないしね」

そう、特別なモノなど、ありはしない。ただの異物でしかない。

「それに……」

「女同士、ですしね」

御留さんの言葉がピリオドとなった。そう、僕は女の子なんだ。こうして男だから、と考える事自体が間違いなんだ。

「……、だよね」

誰かを相手にする必要は無い。

御留さんと一緒に、同じ女の子と仲良く出来るのだから。

これでいい。

僕の手を離し、御留さんが立ち止まった。

振り向いたけれど、暗闇で彼女の顔は見えない。

僕は彼女の姿を照らそうと懐中電灯を向けようとする、彼女は僕を追い越し、道の先に駆けだした。

手にしていたライトが御留さんとぶつかった拍子に森の斜面を転がり落ちていった。手元に明かりは無い。

けれど、僕は御留さんを追わなければならない。

僕はかすかな星明かりが照らす森の闇の中、道の先へ駆けだした。

闇の中を走る。

ただひたすら、走る。追いつかれないように走る。

暗い森を走る。

あの人に捕まらないために。

——知りたく無い。

木々から漏れ射していた月明かりが無くなる

闇の中、木々のざわめきが聞こえるだけ

そのざわつきに、思い出す。

クラスみんなが性を失って行く中、私だけが女のままだった。

そんな私は好奇の的だった。みんなが私の体を見つめてくる。

女子は私の体が気に入らないらしく。胸の事をバカにしてきた。

男子も無性化して女子になって、女子と同じように私の胸を汚いもののように扱いだした。

どうしても耐えられなかった私は、優しくしてくれる男の先生に相談したら、先生は私の体に触ってきた。

怖くて、助けてと叫んだら他の先生がかけつけてくれて、連れて行かれた男の先生は、学校から居なくなった。

届けられたプリントには、私に対する弾劾の言葉で埋め尽くされていた。

みんなにも先生にも嫌われた

そんな私をお母さんは、恥ずかしいものとして扱った。どうしてみんなと違うのだろうと。

女として生まれた事は、悪い事だったのだろう。

私はまだ性を持っているという事で、この学院に預けられた。

なんでも無性化した子供に性を与える病院のような場所らしいと、そこでなら女で居る私も価値あるものとして扱われるのだと聞いた。

半信半疑だった。けれど、私には学院に入るしか選択枝はなかった。 世界のためにも、母のためにも、私のためにも。

学院に行くのも怖かった。人だらけの通学電車、人の居ない最終に乗る。

そして遅刻しないように、走っていたら、あの人に会った。

カッコいい女の子、悠希さん。

まるで物語のような出会いだった。学院に行きたくなくて、電車の中に居たら誰も居なくて、

暗い道をただ走って出たら、悠希さんにに会った。

転がり落ちてぶつかった私を受け止めてくれた。

女の子でも、カッコいいのだと。

こんな物語のような出会いは偶然でしかない、そう考えた。

勘違いかと思っていたけれど、学校でパスが違う事に気づいた。

職員室にパスを届けに行ったら、あの人が居た。

これは、運命なのだろうか。

二人で歩く渡り廊下、そんな事を考えていたら、教室で私と悠希さんがつき合っていると言われた。

着いた席は隣同士の窓際。私を守ってくれるかのように、私を窓際に、自分は教室側に座ってくれた。

もしかして、同じ部屋になるのかも。

そんな期待をしながら寮についたら、同じ部屋だった。

それも特別な私達二人だけ違う部屋。

私は、これは運命なのだと確信した。

掃除の時間、一緒になった人たちにも、私と悠希さんがつき合っているのか？などと訪ねられた。興味を持たれるのが怖かったけれど、この事については嬉しかった。私がそう感じているだけではないのだと。

そんな私のために、みんなが助けてくれる。

夕食で悠希さんの隣に座れるように席を空けておいてくれたし、お風呂では悠希さんと一緒になれるようにしてくれた。

そして、夜に月明かりの下で一緒に行けば結ばれるという庭園に悠希さんと一緒に行けるように肝試しも準備してくれた。

そう、肝試し。

この想いを確かめるために、二人で暗い森の中を歩いてきた。

庭園で願いを叶えるために。

けれど、悠希さんは私の事が好きなわけではなかった。

悠希さんは女の子なのだから。

女同士では結ばれる事は、無い。

つながっていたと思っていたモノが、実はどこにも繋がっていなかった。

それをたぐり寄せて出てきたモノは、ただの誤解という事実、報われないという恐怖、これから続く地獄。

こんな事ならクジを引かなければよかった。

扉を開かなければ良かった。

闇の中で、ただ黙って、彼と手を繋いだまま、一緒に歩いていれば良かった。

私の想いは遂げられないんだ。

闇を駆け抜けると、古い遺跡のような場所にでた。ここが古い庭園なのだろうか、私に戻る道は無い……。

奥に向かい歩く。

砕けた柱が散らばり、天使や英雄や女神の彫像が並んでいる。これが価値があったもの……。この像も全て、今では立ち入れない場所として打ち捨てられている。

しばらく歩くと開けた場所に出た。

地面に巨大な穴があいている。吸い寄せられるように近づくと、そこは沼だった。

暗い沼をのぞき込む、その水面は何も映っていない闇であり、何もかもを吸い込んでしまいそうな闇色の鏡。

覗き込む私の姿は見えない。

これからずっと、悠希さんと同じ部屋で、彼女に嫌われ続けるなら……。

「望みを叶えればいい！」

闇から声が聞こえた気がした。

ふと、頭を上げると、沼の上に人影が見える。ただの純白の人影、光っているのではなく、ただそこが白く塗りつぶされたかのような白い、人の形をしているもの。

その人影は水面には映っていない

これは幻、それともお化け……。

人影は私の目の前に来た。音もなく、歩いたわけでもなく、沼の上を私の目の前に来た。はっきりと見えるその姿は男の人、白い男子学生服を着た人。

「もしも君がその想いを叶えたければ、この卵に願えばいい。そうすれば、君は願いを叶える力が手に入る。」

その手の平には何か黒い卵のようなものが乗っている。

「この卵は君の願い、この卵に願いをかければ、自分の願いを叶える力が手に入る。」

なんだかよくわからない、けれど……。

「君はこれからずっと、叶えられない想いを抱き、腐らせていくのかい？」

私にはこれしかない！

私は卵に手を伸ばす。それは熱く、素手で持ち続けられない。私は卵を沼に落とさないように抱きしめる。

「そう、あとは願えばいい、君が望む事を達成するためにどうすればいいのかを」

私の願い、それは……。

悠希さんと一緒に居たい！

卵は輝き、何かが生まれた。

「それが君の輝くものだ！さあ、汝の欲するを為せ！」

白い人影は闇に笑う。

ようやく辿り着いた夜の庭園、昼間とは異なり、木々のざわめきや廃墟のような光景、人の形をした彫像は今にも動き出しそうで、波一つない沼は闇そのものように、何も写さない。

「悠希さん」

御留さんに呼ばれた気がして振り向くと、そこには影が居た。

その影は渦巻いている、その渦はヘビのような無数に生えた触手で、それぞれが蠢いている。

ヘビの化け物……、御留さん？

その姿には御留さんの面影など微塵も見えない。けれど、どこか御留さんに似ている。けれど……、近づいてはいけないと、体が拒んでいる。

影はゆっくりとにじり寄ってくる。僕が距離を取ろうと後ずさると、影もまたにじり寄ってくる。立ち止まっても、にじり寄ってくる。ゆっくりと僕は沼沿いに移動する。次第に近づいてくるヘビの化け物。

僕の足が段差にひっかかって止まったとき、足下を確かめようと視線をそらした瞬間、何か走った！

その気配に再び前を向いた時。

影は目の前に居た。

触手は視界を多い尽くし、僕を飲み込もうと迫ってくる。

とっさに背を向け走り出した僕の左足を触手が巻きつき捕らえた。

倒れた痛みよりも、左足に染み込んでくる熱の感覚が頭を塗りつぶす。

左足はあるはず、けれど感覚が無い、溶けているかのように、ただ熱いぶよぶよとした液体の詰まった袋がぶら下がっている感覚。

自分の体が欠けて無くなる恐怖に、僕は男で無くなっていった時の事を思い出す。徐々におちんちんが無くなっていく、自分が溶け出し消えていく感覚。

自分の望まない形に、侵され、溶かされ、かき回される感覚。

最も恐ろしいのは、それが恐ろしくないものだ、優しく、暖かく、自分の体を変えていく毒。

捕食するものを動けなくして、丸飲みにして溶かす、蛇の毒。

飲まれていく恐怖に必死で抗うように這いずりながらも前に進む。

この影に飲み込まれば、僕は僕で無くなってしまおう！

男に戻るために学院に来たのに！無くしたモノを取り戻すためにここまで来たのに！  
こんな所で何もかもを失ってしまうなんて、絶対に嫌だ！

僕は……、男に！

戻るんだああああああああああああああああああ！！！！

その時、何かが瞬き、僕の足を貫いた

\*

閃光が瞬き、電流のような何かが僕の足を貫いた。驚いて自分の足を動かす。

動く！

僕の足に巻き付いていた触手は消え、触手の主である影ものたうち回っている。

まだ感覚は完全に戻ってはいない、しびれを感じるものの、僕は足を引きずりながら立ち上がり影から離れた。その時。

再び何かが瞬き、閃光が影を吹き飛ばした。影は半身を吹き飛ばされ、中のモノを露出させている。

それは人の手足のようで、黒く塗りつぶされたかのような闇のような色をしている。

キリキリという音に僕は振り向くと、温室の側に誰かが居る。

左手を伸ばした、長い黒髪の女性。海星先輩が立っていた。

その姿は弓を引き絞るかのようで、その手には光る透明な何かが握られている。

その引き絞っていた手を、矢を放つように放すと同時に、再び閃光が影を吹き飛ばした。

吹き飛ばされた触手はかき消えるように霧散し、影はその中身を露わにした。

それは人の形をしている。長い蛇のようなウェーブのかかった髪、影の触手が服越しに巻きつき絞り上げられている、女とわかる体。

その顔にかかっている鈍い光りを放っているメガネ。それは御留さんのような形をしている……。なにか黒い人影。

その蠢く人影から、再び触手が生えてきて、その人影を縛り上げ飲み込んでいく。

「その妄執、すぐに削ぎ落としてあげる……」

海星先輩の手に再び輝くモノが現れた。よく目を凝らすと、それはナイフのような形をした透明な何かに見える。

それで……、切り捨てる。御留さんを！？

海星先輩はゆっくりとこちらに歩いてくる。

もしかして、あれで御留さんを斬りつけるんじゃない……

僕の横を通り過ぎようとしていた海星先輩の前に、僕は立ちはだかる。

「待ってください、御留さんを切り捨てるって、あの影は一体！そのナイフは！」

海星先輩は僕の目の前で立ち止まると、手にしたナイフを僕に見せた。

そのナイフは透明な割れたガラスのようにぎらぎらと鈍く輝く刃を持っている。その根本には……昼間の庭園で見たファントムクオーツが入っている。

「これはただ削ぎ落とすだけのもの。ユニコーンの刃は人の肉を切り裂く事は出来ないから死にはしないわ」

「幻影の刃で切れるのは幻影だけ」

海星先輩は静かに歩みを進め、僕の脇を通り過ぎようとしている。

「ユニコーン？幻影？」

なんの事だかわからない僕は、戸惑いながらさらに訪ねる。

「あの影は彼女自身の妄執、誰かを飲み込みたい、自分のモノにしたいという執着でできた幻影の触手。月に照らされて地に落ちている影を確かめれば、分かるわ」

その言葉に影の足下を見ると、蛇のような触手が蠢（うごめ）いているのに、地に落ちている影は人の形をしている。

「あれに飲み込まれればあなたは彼女のモノになっていたわ。物言わぬ、ただ彼女の思い通りに動くだけの肉人形にね。」

僕は先ほどの体が溶けて無くなるような喪失感を思い出す。あのまま捕まっていたら……、悪寒（おかん）が全身を走る。

「じゃあ、中にいる御留さんは……」

あの影の中にいる御留さん自身は無事なのかと、

「あの影は彼女自身も侵していくわ。叶わない妄執は自分の心を焼いて行くだけ……、そして解決できないから助からない」

先輩はナイフの刃を掴み、弓を引くようにナイフを飴細工のように延ばしていく。ナイフは矢となり、その鍔（やじり）は鈍く輝く

「彼女を救う事は出来ない、ただ、あの妄執を切り捨てるだけ。そうすれば彼女のあなたへの執着は消え去るわ」

御留さんが、僕を……、

「御留さんが僕を想ってくれた、けれどそれに僕が気づかなかったから、こうなったって事ですか！？」

頭は回らない、けれど先輩の前に立ちふさがる。



先輩はただ僕の目を射抜いている。

「彼女はこのまま放っておいても影に喰われて何もかもを無くす。あなたが彼女のものになる事で解決しようにも、既に影に飲まれている彼女に言葉は届かない、あなたを人形にするために触手で侵して、自分の肉人形にする」

先輩は矢を引き絞ったまま、僕を貫くように見つめている。

「だからあの幻影を切り捨てて、彼女を救う。そうすればあの子もあなたへの妄執を忘れ、今後あなたが彼女に狙われる事も無くなる」

「他人の幻想を成立させても、救える人間も居ないし、助かる人間も居ない」

先輩が、引き絞る。

「どきなさい」

僕は、彼女の想いが切り捨てられる事で助かる。それは何かが……、違う！

「どけません！」

「あなたは彼女を救いたくは無いの？」

御留さんに助かって欲しい！けれど、自分を切り捨てる事が、助かる事とは思えない。それは、自分の体で、分かっている。

「何かを失っても救われない、それはただ無くなるだけ。無くす事と切り捨てる事は、違う！だから！！」

「けれど彼女は捨てられないから、ああして妄執に取り憑かれて影の化物となったわ」

それでも僕は、先輩の目を、射抜く。

「そこまであなたが彼女を救いたいなら……」

先輩が引き絞っていた手を緩める。

「自分で助けなさい」

そういうと先輩は手を差し出してきた。その先輩の手の中に刃は無い、幻影水晶（ファントムクォーツ）のペンダント、ユニコーンが、月明かりに照らされ輝いている。

先輩の手の中にあるペンダント、幻影水晶（ファントムクォーツ）、がユニコーンの彫像で出

来た台座に収まり、銀の鎖がそれを繋ぎ止めている。

これを手にして戦って、あの影をどうにかすれば、御留さんを助けられる！

僕は迷わずペンダントを手にとると、御留さんの方を向いた。

ユニコーンを握っている手が熱い。

「鎖を自分の手に巻き付けてしっかりとユニコーンを握り、彼女を救いたいと願いなさい、ユニコーンはそのための形になってくれるわ」

僕は先輩の言葉に従い、ユニコーンが手から落ちないように銀の鎖を手で巻き付け、しっかりと握りしめ、願った。

あの触手を打ち払う武器を。あの影から御留さんを助け出す、そのための形を！

手にしているユニコーンが僕の願いに応えるように輝き出す、その眩しさに目を開けていられない。

手を通して体中の力がユニコーンへ流れて行くような感覚が伝わってくる。自分の体が手から先に伸びていく感覚、太く硬く脈打つモノとなっていく感覚。

輝きは収まり、目を開けた僕の手には大きな光の棒が握られていた。

これが、僕のユニコーン……。

自分の腕の長さ程はある大きさの光の棒、重さ無く、まるで自分の体の一部のように軽い。それは自分の体とつながっている、そんな感覚が伝わってくる。

僕は棒を振り回し構えた、これならいける！立ち向かう武器さえあれば、あの触手をどうにかできる！

暴れていた影が再び触手を伸ばしてくる、僕は光の棒を構え。

「やああああああああああ！！！」

おもいきり振り切り触手を打ち払った！と同時に、自分の腕に痛みが走る。

打ち払われた触手は後ずさり、鎌首（かまくび）をもたげた蛇のように様子をうかがっている。

「ユニコーンは幻影の剣、自分の意志を形にしたもの。打ち合えば痛みが貴方の体を貫くわ」先輩の言葉に驚く間もなく、触手が伸びてくる！

すかさず構えた棒で受け止めるも、衝撃に踏みとどまらず僕の体は吹き飛ばされた。

地面に叩きつけられ、ユニコーンが手から離れた瞬間、手にしていた光の棒は弾け飛んだ。

砕けた光の棒から伝わった痛みが全身を走る。

その自分の体を引きちぎられたような痛み、ただうずくまり悶える。

その僕を先輩が見下ろしている。

「あなたの思い込み程度の幻想なんて、自分の手から離れればたちまち消えるような脆いもの。そんなもので彼女を救う事はできはしない」

救われない？僕の力じゃ？痛みに朦朧（もうろう）となりながら、先輩の言葉に耳を傾ける。

「なぜならあの影は彼女自身の救われないという妄執が影となったものであり、その妄執が相手を自分のモノにしたいという欲求として影の触手を形作っているのだから」

「そしてその触手であなたを捕まえられないから、行き場を無くした望みは自分の体を包み込み、縛り上げている。こうしている今も」

御留さんを包み込んでいる影そのものが触手で、あれが御留さんを……。

「あの触手はあなたが感じたような感覚で、彼女自身を蝕んでいき、やがて彼女は何も考えられないただの生きた屍になる」

触手に捕まった時の感覚を思い出す。体の感覚が無くなり、溶けていくような熱、それを御留さんが……。

「それは人間のように生きているけれど、人間とは違うもの。ただ命令のままに生きるだけのものに」

ただ何者でも無くなり、生きる。それを僕は……知っている。

何故、御留さんが……。

「何故こんな事に……」

現実感の無い出来事。けれど、実感のある痛みを言葉にできない。

「それを今話している場合ではないわ」

先輩はうづくまる僕に手を差し伸べている。

「想いの強さだけなら、妄執に囚われ我を忘れてる彼女には勝てない」

「そして、あなたがただの幻想で拒み続けても彼女は救えない。それが妄執の原因であるあなたであっても」

「彼女を救うためには、手遅れになる前に、あの影を斬り裂くしかない」

ユニコーンを、返せという事なのだろうか……。

「彼女は今あなたを自分のものにしようとしている。そんな彼女をただ拒んでいるだけじゃ決して勝てはしない。そして受け入れたら、あなたは彼女の触手に捕らわれ肉人形に変えられる」

「たとえ、彼女の影を払ったとしても、その妄執は解決しない。あなたを自分のものにしないかぎり」

御留さんの願いを切り捨てなければ、彼女を助けられない……。

違う、どこかにあるはずなんだ……。

先輩は言葉を続ける。

「願い……、想いがすべて綺麗なものじゃない、他人を侵す毒もある」

「善悪を分かつ事が出来なければ、彼女の触手を切り裂く事は出来ない」

善悪……、今の僕にはよくわからない。

「でも、僕は御留さんを助けたいんだ……」

手を着き、顔を上げる。

「じゃあ、彼女のモノになるの？」

「違う、僕は……」

膝をつき、体を起こす。

「なにが善悪かわからない……けれど、誰かを想う事は正しくて、誰かを思い通りにすることは、違うと思う」

両足で立ち上がり、先輩に背を向け、御留さんと向き合う。

「御留さんが好きだとか、嫌いだとか、まだわからない……」

「けれど……、僕を好きになってくれた」

ユニコーンを構え、再び願う！

「あなたが助けたいのはあなたを好きになってくれたという好意であって、彼女を助けたいわけじゃない。それは執着でしかないわ」

「それでも……僕は！」

「御留さんの想いを守りたいんだ！！！」

ユニコーンが輝き再び光の棒になった！

「誰かの幻想を救うという事は、あの触手と永遠に戦い続ける事になる、それでもいいのね？」

先輩の言葉に、頷く。

「……彼女を救いたいという自分の願いを叶えたければ、私に剣を向けなさい」

迷わず振り向き、海星先輩に剣を向ける。すると、先輩は僕のユニコーンに手を添え、その刀身を撫でた。

僕の光の棒の表面を、さらに光輝く油のような液体が包みこむ。

その液体が光の棒を締め付けてくる感覚が伝わってくる。

「幻想よ、幻影として形を成せ」

言葉と共に硬く重いハンマーのようなもので殴られる痛みが走る。それでも踏みとどまる。

「願いよ、闇を分かつ刃を成せ」

言葉と共に、棒の表面を肉が削られるような痛みが走る。それでも歯を食いしばり、耐える。

「剣よ、幻想を照らす光明と成れ！」

先輩の言葉と共にユニコーンがひとときわ輝くと、焼けるような冷たさが棒に染み込んでくる。  
その眩しさと痛みで目を閉じる

痛みが収まり、目を開くと、僕の手の中に光の棒は姿を変えていた。

物語に出てくる英雄や勇者、王子様が振るうような剣に。

その刀身は水晶のような透き通った刃を持ち、その水晶の中には幻影水晶（ファントムクォーツ）のように、幾重にも水晶が閉じこめられている。

ユニコーンは光り輝く、幻影水晶の剣となった。

重い！

自分の腕の長さほどの片手持ちの幅広な短い剣。けれど、自分の腕よりも二周りもある大きな水晶の固まり。それは石の固まりと同じで、石柱を持っているのと同じだ。

その重みに耐えきれず、切っ先を石畳に落とす。

切っ先が欠け、砕けた水晶は光の塵（チリ）になる。

その瞬間に走る爪をはがれたような痛み、この幻影水晶の剣もユニコーン。光の棒と同じようにこの剣が傷つけば自分も痛みを感じる、光の棒とは違う、刺すような痛み。

水晶の剣といっても石と同じ、さっき光の棒より硬い分、簡単に割れるものかもしれない。

もしこの剣が砕けたら……、その恐怖を振り払う。

動けない所に襲いかかってくる影の触手を必死に柄を持ち上げた剣で受け止める！

手応えがない。

幻想で出来た剣に触れた妄執の触手は塵になる。

影は悲鳴を上げ、暴れる。

触れただけでも影を霧散させる事ができる剣、これならあの触手を簡単に振り払える。

しかし、剣を振るえなければ、触手を切れず、御留さんを助けられない。

物語の登場人物ならこんな剣を片手で軽々と振り回しているけれど、現実には僕の細腕では支えるのがやっとなほど重く、両手で握りしめればやっとな浮かせられるかどうか。

影が暴れている際に、まずはこの剣を持ち上げないと。僕はユニコーンの片手でしか掴めない狭い柄を両手で握りしめ、全身の力で引き抜くように……。

剣を！振り上げる！！

振り上げ、頭上にかかげた剣は重く、揺れる剣が手から落ちそうになるのを、必死で掴む。

離せば剣は消える、この剣が砕ければ今度こそ死ぬかもしれない！

剣は重くぐらつき、傾き倒れる！ここで離せば、御留さんを助けられない！

剣を離さないように柄を握りしめたままの僕はバランスを崩し、前のめりに倒れる。

剣は石畳に叩きつけられ、先端の刃が砕た。その痛みが全身を貫く。頭が割れたかのような痛みが走り、こめかみが焼けるように熱く疼く。ユニコーンの時の殴られるような、肉の痛みとは違う割れるような、刺すような痛み。

それでも立ち上がらないと、この剣を振るわないと、御留さんを助けられない！！

剣を杖に、立ち上がる。剣に加わる重みで刃が欠けていき、その痛みがじりじりと全身を刺す

。

動けない僕に触手が襲いかかってくる！

その触手を、支えにしていた剣で一気に――。

振り抜く！

手応え無く霧散した触手、振り回される剣に従い足を踏み出し、体ごと回って勢いに乗る。

振り回される事が分かっているならば、その勢いに乗ればいい！

そのまま振り抜いた剣を地面に突き立てブレーキをかける。石畳に突き立てる事で刃が砕ける痛みも、構えて居れば耐えられる！

触手を斬り裂かれ暴れる影は激昂したかのように無数の触手を延ばしてくる！

その触手を、剣で振り斬り、踏み込み、石畳に打ちつけ、止める！

一振りする毎に打ちつけられる痛みを味わいながら、一步ずつ踏み込んでいく。

剣から伝わってくる痛みは頭の中で響きわたりながら、こめかみを焼き、うなじを刺し、首を焼き、背筋を貫く。

それでも全身の力を振るい、剣を振り上げ、触手を振り切り、一步ずつ歩み、剣を削りながら進んでいく。

影まで十歩も歩けば届く程の距離に踏み込む、その距離が遠い。

近づくほどに襲ってくる触手は速度を上げ、何本もの触手が蛇のように飛びかかってくる、それを叩きつけるように一気に振り切り、踏み込む！

振り切れなかった触手が足に絡みつき、毒のような熱で侵してくるも、石畳に叩きつける刃で打ち貫く！

毒の熱を痛みで振り払い、足を引きずりながらも進む。

この毒の痛みで、御留さんは苦しんでいる。あの影の中で今も！

飛びかかる無数の触手は既に振り切れる数ではなく、体に巻き付いて来たものを飛びかかってくる触手と一緒に剣で振り切り、突き斬る！

剣が砕ける痛みと毒の痛み、痛みで既に頭は焼け焦げたかのように視界は暗い、考える事は出来ずただ苦痛だけが響く。それでもただ振り切る！

誰かのために何かをするなんて馬鹿らしい。

他人の幻想に答えなければ騙されただけの裏切られたのだと罵られるあけだ！

御留さんもみんなと同じように、僕に勝手に期待して勝手に裏切られたと誤解しただけだ。

――剣は砕け、既に肘から先程の長さしかない。

けれど、御留さんは僕を王子様だと言ってくれた、僕を男として見てくれた、僕が取り戻したい、そうなりたいモノを想ってくれたんだ！！

——既に影は目の前。

僕は誰かのためじゃない、御留さんのためですらない。

——伸びて居る触手は全て切り払った！

ただ、僕は！

僕のために！

——今なら振り切れる！

御留さんを救いたいんだああああああああ！！！！

剣を振りかぶろうと持ち上げているその時、ヒビ割れ、欠けた刀身を透かして御留さんの姿が見えた。

黒く塗りつぶされたような影の中に、御留さんの姿がはっきりと見える。

御留さんを、救う——。

振り上げた剣を全身の力を振り絞り、一気に振りおろした。

空を切った刃は石畳に叩きつけられ根本から折れ粉々に砕け散った。弾け飛んだ水晶が撒き散らされ、星のように輝く。

そうだ、助けるんだ——。

全身が砕けそうになるような痛みが響きわたる。

力が抜け。

倒れ。

ない。

立っているだけの体、それでも手を伸ばす。



延ばした手が影に包まれている御留さんの手に触れる。甘い痛みが体に染み込み、影から伸びた触手が腕に巻き付き、感覚を溶かしていく

それでも手を離さない、御留さんの手を握る。

「御留さんが僕の事を想ってくれたことに気づけなくて、……ごめん」

脳裏には、御留さんとの出会いから学校での再会、部屋の掃除や一緒にご飯を食べて、お風呂に入って、一緒にここまで来たことが浮かぶ

「僕は御留さんの事が好きか嫌か、まだわからない……」

「けれど、僕は君と出会えた事が嬉しかったんだ……」

感覚は無くなり、自分は立っているのかわからない。既に痛みも感じず、熱にうかされたように、呟き続ける。

「僕は男だったんだ。けれど、男じゃ無くなった。だから僕は王子様にはなれないんだ」

「でも、御留さんが、僕を王子様だと想ってくれた事は、嬉しかったんだ……」

目の前の影は動きを止め、ただ在る

「僕は王子様にはなれないかもしれない、それでも僕は……」

御留さんの手を。

「御留さんと……」

両手で握りしめる。

「一緒に、居たいんだ」

僕は願った、御留さんが笑顔を取り戻してくれる事を。

僕の手を熱く締める感覚。目を開くと、御留さんの手が見える。

「私も……悠希さんと一緒に……」

手を包み込んでいた影は無い。

「居たいです……」

顔を上げると、御留さんの姿が見える。

小柄で、膨らみのある、女の子の体。

柔らかそうな髪に、涙をあふれさせる瞳。

ただ見つめあいながら、その場に崩れ落ちるように、座り。

寄り添うように倒れた。

——僕は、御留さんと、これからも一緒に居たい。

砕けた水晶が星のように輝く真中で、寄り添うように眠る二人。その二人の繋ぎあった手の中でユニコーンは静かに輝いている。

その側で、海星は二人の姿を見つめる。

「この子達はどこまで駆けられるのだろう……」

その三人を彼方の高みから白い人影が双眼鏡越しに見つめている。

「やさしいなあ。実に優しい……」

「夢見がちな、お姫様だ」

闇の中、安らぐ。

ここは暖かくて、何か、いい匂いがする。  
その温もりを味わいたくて、抱きしめる。  
その鼓動に、安らぐ。  
背中を暖める熱が、目覚めを誘う。  
何だろう、この暖か……。

目を開けるとなにやら白い布に包まれた何かがある。  
少し引いて見ると、それは胸だった。

「……」

どうやら僕は、御留さんの胸に顔をうずめていたらしい。  
ゆっくりと頭を離し、視線を上げると、御留さんがすやすやと寝息を立てている。  
体に掛かっているのは毛布、僕らは同じ毛布にくるまれて添い寝している。  
落ち着こう、落ち着こう、落ち着こう。  
なぜこうなっているんだ。

破裂しそうな心臓は全身をかきまわし、飛び起きそうになる衝動を必死手で押さえつけ、猛回転して熱暴走しそうな頭で必死に……、思い出した。

夜の出来事を。

夜の森で御留さんと別れ、夜の庭園で影の触手の化物と遭遇し、海星先輩にもらったユニコーンを剣にして影を振り払って、御留さんを助けることが出来たんだ。

するとこの毛布も先輩が……。

毛布の中でゆっくり頭を上げて辺りを見回すと、そこはガラス張りの温室の中だった。あたりにはバラの香りが満ちている。

澄み切った雲一つない明けの空はまだ薄暗く、日差しは地平線からこの温室の中を照らしている。

とりあえず毛布からでないと、御留さんが目を覚ましたら大変な事になるな……。

女の子と添い寝して一晩を明かすだなんて、こんな気まずくなる事はない。

昨夜の出来事が脳裏をよぎるも、夢の出来事のように幻想的な出来事に実感が沸かない。  
幻想よりも現実！今はこの状況を打破しないと！

「んにゅ……」

御留さんが目を開いた、夢見心地に薄く開かれた目と視線が合うと、その瞳は夢から覚めたように見開かれる……。

「えっ！？悠希……さん？」

「お……おはよう！」

挨拶している場合じゃないけれど選択肢は無い。

「おはようございます」

このまま寝てくれると僕としては助かるけれど、それはそれでこの後……、あ。

「御留さん！」

「は、はいっ！」

見つめあい、呼吸を整え、告白する。

「寮に戻らないと！」

僕らは夜の森に肝試しに行ったままで、そのまま寮に戻らず外泊、失踪で騒ぎになっているかもしれない！

「……、あ—————っ！！！」

御留さんも事態に気がついたようで、僕らは慌てて飛び起きた。

温室の時計は午前六時を指している。起床時間は七時だからそれまでに戻らないと！

毛布はここに置いておけばいいとして……。

「めがね～、めがね～」

御留さんが目を3にしたままメガネを探している。

その御留さんの後ろ、枕元にメガネは畳まれて置かれていた。

御留さんに渡そうと手に取ると、そのレンズにはヒビが入って、大きく欠け落ちている事に気づく。あの時の戦いでこうなったのだろうか。僕の手にあるメガネに気づき、視線を落とす御留さん。壊れたメガネを手渡すのは気まずい。

御留さんはぼくの手にあるメガネを見つめ、手に取る。そっと触れる指先がやわらかい。

御留さんはメガネをたたんだままポケットに入れた。

「御留さん、メガネが無くても大丈夫？」

「ええ、全く見えないわけではないのでなんとか」

二人で温室を出る。朝の山の空気は冷たく、震える。

よろめく御留さん。その手を取り、握る。

朝日に照らされる御留さんの横顔を見つめ、

「行こう！」

「はい！」

御留さんの笑顔は眩しく、握り返してくる手が暖かい。

朝日を背に受け、僕らは二人で歩み出す。

——さあ。みんなにどんな言い訳をしようか。

つづく